

住まいの中での親子の会話に関する研究

吉本健太郎*・山本善積

Research on the Parent and Child's Conversation in Residence

Kentaro YOSHIMOTO, Yoshizumi YAMAMOTO

(Received September 30, 2005)

はじめに

(1) 現代家族のコミュニケーションをめぐる問題

現在、毎日のように家庭内での事件がテレビやラジオ、新聞などによって報道されている。そして、その原因を考える際、家庭や親子関係を問われることが多々ある。平成13年度の内閣府「国民生活選好度調査」では、親子の絆が弱まっているかという質問に対して、61%もの国民がそう思うと回答しており、そうは思わないと回答している国民はわずか15%である¹⁾。また、自分の子供の気持ちがあまり分からないと感じている親も少なくない²⁾。これはあくまでも意識調査であるが、親子のあり方が少しずつ変わってきているように感じられ、その背景には親子間のコミュニケーションが十分にできなくなっていることが考えられる。

コミュニケーションは私たちにとって、また子供たちの心身状態にとって大変重要であり、家族とのコミュニケーションが「イライラする」「むかつく」などの子供の心の健康状態と関係しているといわれている³⁾。親とのコミュニケーションについての子供の認知が低い場合や親子コミュニケーションについてのずれが生じる場合、子供に何らかの不応症症状がでることも報告されている。都内の小学5年生とその母親を対象とした調査で、「わが子は自分に可愛がられていると思っている」と答えた母親は69%を占めていたのに対して、子供は「自分は母親に可愛がられている」としたものが53%にしか達しなかったとしている。また、母親とのコミュニケーション不全が子供の登校意欲の減退に関与していることが報告されており、親子間でのコミュニケーションがうまくできていないことが、頭が重い、身体がだるいなどの、特定の病気としてまとめられない身体の不調（不定愁訴）の要因となっている。

現在、中学校2年生の男子では「イライラする」と感じている生徒が53%、女子もまた52%あり、男女双方の半数以上が「イライラする」と感じている⁴⁾。しかし、驚くべきことは、小学校2年生の男子で43%、女子で42%が「イライラする」と感じており、不定愁訴が小学校高学年から中学校にかけての思春期のみに見られるものではなく、小学校低学年のときからすでに現れ始めていることである。その他に、何もやる気がしない（中学生で50.8%）、なんとなく不安である（中学生で47%）、一人きりが一番楽だ（中学生で38%）などの無気力感も現在の子供たちは抱えている⁵⁾。さらに近年、「キレる」行動が社会問題化してきている。この「キレる」要因には①耐性が欠けている（耐性欠如）②攻撃性が認められる（攻撃型）③不満を抱え込んでいる（不満型）があり、これらもまた、親子関係と切り離して考えることはできない。

*山口大学大学院教育研究科

このように、現在の子供たちが抱える種々の体調不良や問題行動は家族関係と深く関わっている。親子コミュニケーションが不足することで、子供たちの心が不健康な状態になってしまい、様々な問題に繋がっていつてしまうのではないかと考える。

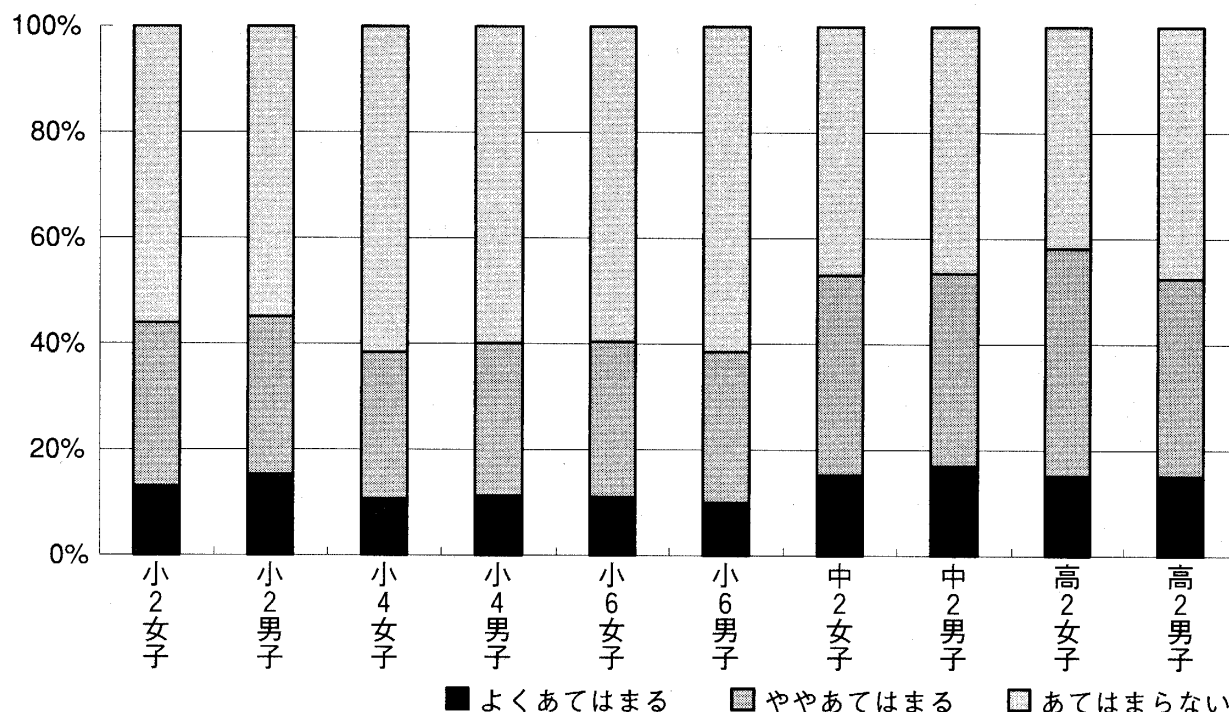


図1 私はイライラしている。

(2) 研究の目的と方法

親子のコミュニケーションについて考える際、その手段として、会話は非常に重要な役割を担っている。そこで本研究では、中学生の家庭における親子間の会話状況を個人、家族の行動の実態、また、コミュニケーション活動を通して掴み、親子コミュニケーションのあり方を考察することを目的としている。

親も子も、家庭内では個人単位の行動が増えてきている。保護者と一緒にいるにも関わらず、個人主体の行動をするために、コミュニケーション活動が伴っていないことも多いと考えられ、従って、個人、家族の行動とコミュニケーション活動との関係、会話の内容についても掴み、これからの親子コミュニケーションのあり方について考察する。

研究方法は山口県内の中学校の2年生、203名を対象とし、2004年10月に家庭内の親子コミュニケーションに関するアンケート調査を行なった。アンケート内容は「住まいの中での親子の共有時間」、「食事中における親子の会話」、「行動の共有からの会話機会」、である。なお、回収したものは203名中169名で、回収率は83%であった。

「住まいの中での親子の共有時間」では生徒自身の持ち部屋状況から、家庭内で主に過ごしている部屋、テレビを見る部屋、勉強をする部屋など、生徒の行動別に過ごす部屋や保護者と一緒に過ごす時間とその内容、保護者と一緒に過ごしたいと思うとき、一人で過ごしたいときなどについて調査した。その結果から、親子の会話状況や会話内容、また、個が優先された行動状況、内容について考察する。

「食事中における親子の会話」では家で夕食を食べる頻度、夕食時における家族状況、夕食時における保護者との会話内容、夕食の開始時の家族状況、夕食時におけるテレビ状況について調査した。食事中は、会話などのコミュニケーション活動が起きやすい場であり、親子のコミュニケーション活動について考える際、重要であると考えた。

「行動の共有からの会話機会」では家族の中での役割分担の有無、役割分担以外でのお手伝いの状況、お手伝いの際の会話の有無について調査した。役割分担やお手伝いは家族のために行なう行為であり、個人主体の行動ではないと考えられる。個人主体の行動が増えているといわれている現在、個人主体ではない行動状況の把握と、その際のコミュニケーション活動の有無について調査する。

分析には SPSSX 統計パッケージを使用し、男女による統計的な有意差の検証には X^2 検定を行なった。

住まいの中での親子の会話状況

(1) 住まいの中での親子の共有時間

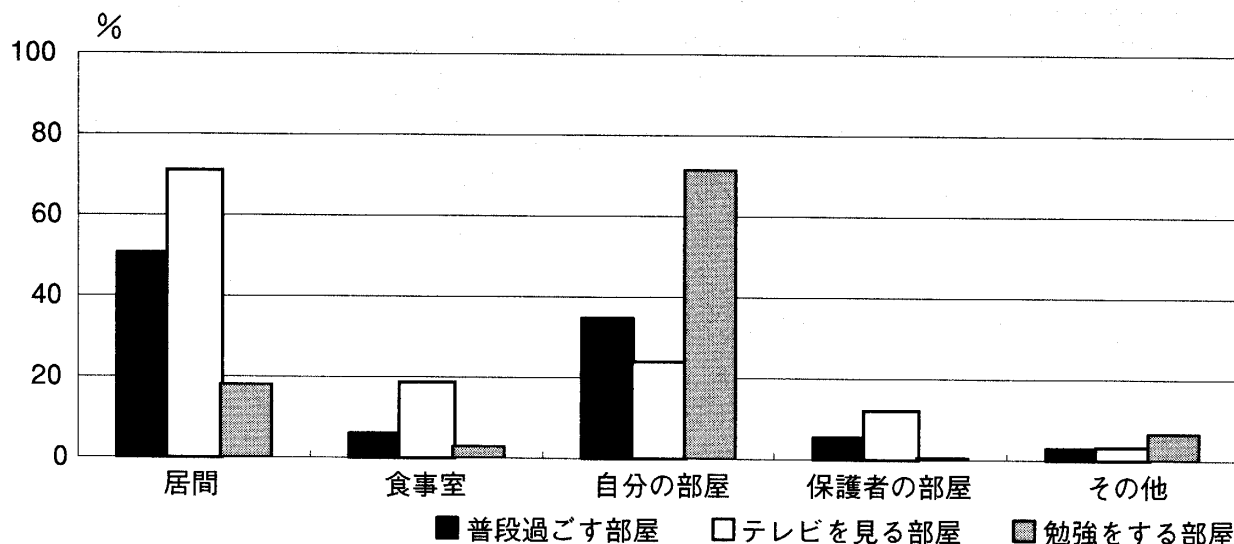
住まいの中での親子の会話状況を掴むにあたり、親子がどの程度一緒に過ごしているかを調べる必要があると考えた。親子が一緒にいることによって会話の機会が生まれてくるからである。そこで、住まいの中での保護者との共有時間、生徒の住まいの中での過ごし方を掴んだ。

行動別に過ごす部屋から、行動を①普段主に過ごすのは居間50.6%、自分の部屋34.8%、②勉強をする部屋は、自分の部屋71.5%、居間8.2%③テレビを見る部屋は、居間70.8%、自分の部屋23%であった。

9割という多くの生徒には自分専用の部屋、または兄弟と共有の自分の部屋が与えられていたが、普段主に過ごす部屋として約半数の生徒は、居間で過ごすと回答しており、約35%の生徒が自分の部屋と回答していた。勉強をする際には居間で勉強をすると回答した生徒も約2割程度いたが、7割以上の生徒が自分の部屋で勉強を行っていた。テレビを見る際には7割の生徒が居間でテレビを見ている。次いで自分の部屋、食事室となっているのであるが、自分の部屋でテレビを見ている生徒の部屋にはテレビが置いてあるということである。

このように生徒達は自分たちが行なう行動によって使用する部屋を選択していることがわかった。テレビを見る際には多くの生徒が居間を使用し、勉強のような個人が主体となる行為を行なう際には、自分の部屋を使用しているのである。一方で、最も多いとはいえ、普段主に過ごす部屋として居間を挙げた生徒は半数程度であり、自分の部屋で主に過ごしているのは約35%もいた。居間は住まいの中の団欒の場である。そのため、一人で過ごしているとは考えにくく、その場に保護者、または家族の誰かがいることが考えられるため、親子間での会話やその他のコミュニケーション活動が期待できる。それに対し、自分の部屋はあくまで個人の空間であり、自分の部屋で過ごしている場合、一人で過ごしていることが予想されることから親子間での会話もその他のコミュニケーション活動もあまり期待できない。

保護者と一緒に過ごしている時間帯について質問した。また、その際に保護者と同じことをして過ごす場合には、保護者とのコミュニケーション活動が期待されるのに対して、保護者はテレビを見ており、生徒は携帯電話を使用しているような、保護者と一緒であっても保護者とは異なることをして過ごす場合には、保護者とのコミュニケーション活動が期待しにくいいため、その時間帯の行動を「保護者と同じことをして過ごす」、「保護者とは違うことをして過ごす」に区分して質問した。また、本稿では表記していないが、その際にどのようなことをして過



注：テレビを見る部屋については複数回答

図 2 行動別に過ごす部屋

しているかも同時に質問した。

その結果、「保護者と同じことをしている」と回答した生徒の割合が高い数値を示したのは「7時台」の68%、「19時台」の67%であり、「保護者と違うことをしている」と回答した生徒の割合が高い数値を示したのは「20時台」の61%、「21時台」の59%であった。

この結果から、保護者と同じことをして過ごすことは、朝夕の食事の時間付近で多くみられる。一方で、保護者と一緒にいるにも関わらず、個人主体の行動が多くみられるのは「20時台」以降であり、夜間に高い数値を示していることがわかる。

行動の内容別では、「話をする」や「食事をする」のような、保護者とのコミュニケーションありそうなものはやはり、7時台、19時台に多くみられ、「勉強をする」、「携帯電話・電話を使用する」のような個人が主体となる行動は、20時以降に多く見られた。「テレビを見る」では、7時台、19時台は、保護者と一緒に見ている生徒が圧倒的に多いのだが、21時以降は保護者と一緒にはテレビを見ておらず、親子で違うことをしている様子が見られた。また、男子に比べて、女子は保護者との会話や、一緒にテレビを見るなど、保護者と同じことをして過ごす場面が多かったのだが、20時以降では、保護者と一緒にながらも、携帯電話・電話を使用するような、個人主体の行動も男子に比べ女子の方が多かった。

保護者と一緒に過ごし、保護者と同じことをしている場合は会話が期待できる。しかし、中学生時期が親との距離をあげようとする時期であることを考慮すれば、保護者と同じことをしていなくても、保護者と一緒の空間で過ごしていることを重要視しなければならない。

生徒たちはどのようなときに保護者と一緒に過ごしたいと思ひ、どのようなときに一人で過ごしたいと思っているのかを掴むため、まず、保護者と一緒に過ごしたいと思うときについて質問した。その結果、食事をする際に保護者と一緒に過ごしたいと回答した生徒の割合は66%で最も多かった。次いで「話をする」と回答したのが53%、「テレビを見る」と回答したのが26%、「その他」と回答したのが15%であった。「勉強をする」と回答したのは7%、「本を読む」と回答したのは0%であった。

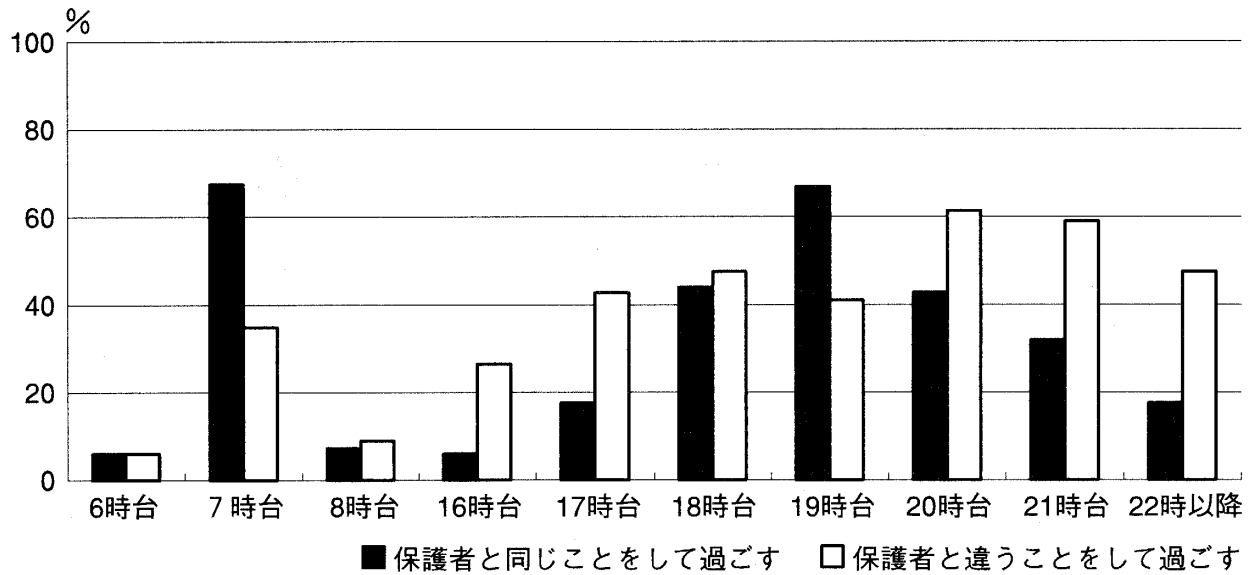


図3 保護者と一緒に過ごしている時間帯 (複数回答)

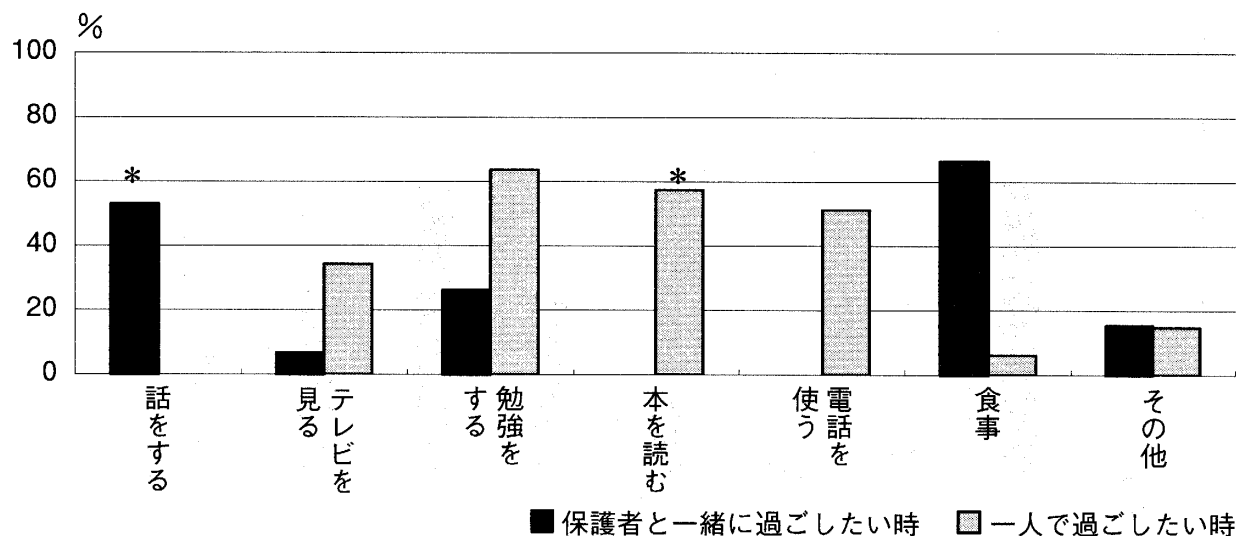
「話をする」を男女で比較したところ、男子では45%だったのに比べ、女子では62%であり、男女差が認められる結果となった。また、「その他」の回答者の中には、保護者と一緒に過ごしたいときはないと回答した生徒も数名いた。

次に、一人で過ごしたいと思うときについて質問した。その結果、勉強をする際には一人で過ごしたいと回答した生徒の割合が64%と最も多く、次いで「本を読む」と回答したのが58%、「携帯電話・電話を使う」と回答したのが51%、「テレビを見る」と回答したのが34%、「その他」と回答したのが15%、「食事をする」と回答したのは6%であった。

「携帯電話・電話を使う」を男女で比較したところ、男子では33%であったのに対して、女子では72%であり、男子に比べ女子の方に携帯電話や電話を使用する際に一人で過ごしたいと思っているものが多いことがわかる。

保護者と一緒に過ごしたいと生徒が思うときは、食事をするときや会話をするときであった。前の質問により、保護者と一緒に過ごしている時間帯が食事の時間帯に集中していたが、その要因として、生徒も食事のときは保護者と一緒に過ごしたいと思っているからだと考えられる。また、一人で過ごしたいときは勉強や読書、電話を使用するときであり、保護者と一緒に過ごしたいときは異なり、個人主体の行動をするときであった。

平日の保護者との会話状況の評価について質問したところ、「まあまあできている」と回答した生徒の割合が47%と最も高く、「十分にできている」と回答したのは35%、「あまりできていない」と回答したのは17%であった。「まあまあできている」と回答した生徒の割合が、最も高い数値を示していたのだが、「十分にできている」と回答したものを合わせると83%になり、保護者との会話ができていると回答した生徒が多い結果となった。次いで休日の保護者との会話状況の評価について質問したところ、平日同様に「まあまあできている」と回答した生徒の割合が42%と最も高く、次いで「十分にできている」と回答したのは41%、「あまりできていない」と回答したのは17%であった。この結果から平日と同様、最も高い数値を示したのは「まあまあできている」であったが、「十分にできている」は平日に比べ、6%高い数値となり、平日に比べると会話ができていると生徒たちが思っているようである。休日もまた「十分に



*印はカイ2乗検定で男女による有意差が認められた (<0.05以下)

図4 保護者と一緒に過ごしたいと思うとき、一人で過ごしたいと思うとき (複数回答)

きている」と「まあまあできている」を合わせると83%となり、保護者と会話ができていると感じていることがわかる。

平日、休日ともに多くの生徒は保護者との会話ができていると感じているが、会話ができないと感じている生徒も2割いることがわかった。

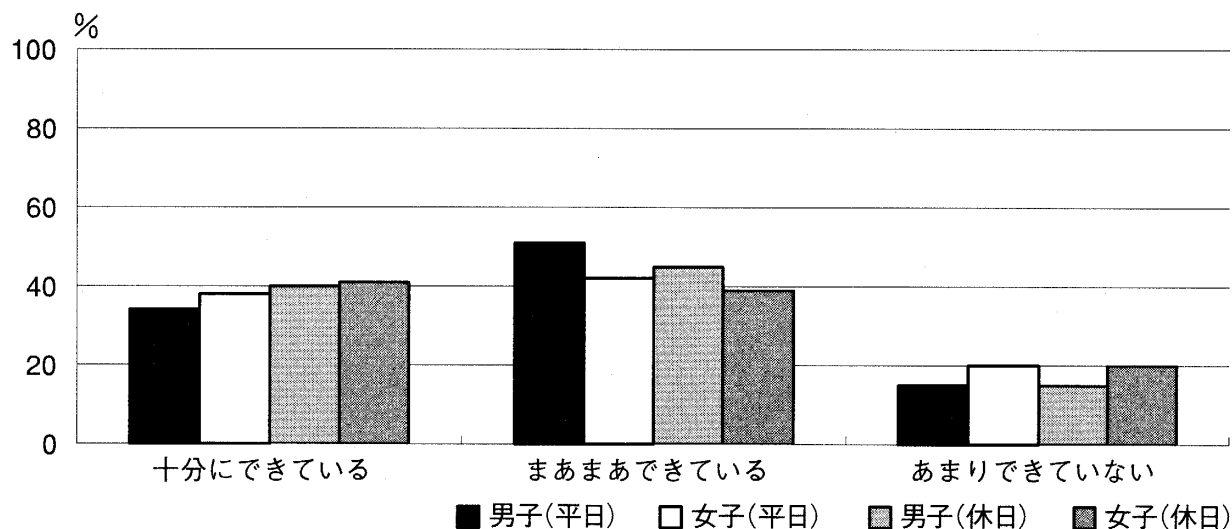


図5 保護者との会話の充足度

(2) 食事中における親子の会話

現在、子供たちの食生活が問題視されている。忙しい現代社会の中で、「食」の中心的な役割を持つ家庭の状況も、家族が好きなものを好きな時間に各々が食べるという個食や、子供が一人で食事を摂る孤食が増加しており、そのような問題が朝食だけでなく、夕食にまで広がっていることから、子供たちの心や身体に及ぼす影響が心配されている。そのため、各小中学校

では食育に取り組み、子供たちの食生活の改善を進めている。特に山口県では「子供の元気創造推進」のもと、食育、運動、読書の推進を進めている⁶⁾。しかし、それはあくまでも近年言われ始めたことである。食に対する問題視はすでに1980年代から始まり、身体的な理由なしにイライラする、身体がだるいといった不定愁訴と食との関係が注目されはじめていた⁷⁾。これらのことから、食と家庭とは決して切り離すことのできないつながりを持っている。

保護者と一緒に過ごしている時間帯は食事の時間帯であった。また、66%の生徒が食事の際に保護者と一緒に過ごしたいと思い、一人では過ごしたくはないと思っている。食事の場は家族が顔を合わせ、会話が期待できる場であり、家族のコミュニケーションの基本と考えられることから、食事の際の会話の有無とその内容、家族状況について質問した。

まず、生徒が家で夕食を摂る頻度であるが、8割以上の生徒が週に6～7回家で食事をするという回答していることから、大多数の生徒がほぼ毎日家で夕食を摂っている。しかし、少数ではあるが、食事を家でせず、外食などに頼っている生徒もいる。このような孤食が多い生徒は食事という非常に親子の会話に期待できる場にはいないことから、親子の会話が十分にできていないことが予想される。

夕食時の家族の集まり状況は、「みんなそろふことが多い」と回答したのは48%、「家族の誰かがいないことが多い」と回答したのは45%、「自分だけのことが多い」と回答したのは5%、「その他」が2%であった。家族全員が揃って夕食を摂るのは全体の半数程度であるが、家族の誰かがいないことはあっても、一人で夕食をするいわゆる家庭内での孤食とよばれる状況にある生徒はごくわずかであり、ほとんどが家族と夕食を摂っていることがわかる。

夕食時の集まり状況について、家族全員が揃っている生徒が約半数であるが、一方で家族の誰かがいない状況での食事も多く、家族全員が揃う状況とほぼ同じ割合であった。夕食は前述したように家族同士の会話や親子での会話に期待できる場であるため、できれば家族全員が揃うことが望ましい。そこで、家族の誰かが夕食の時間に遅れてしまう際に、残りの家族が夕食時間を遅らせ、一緒に食べるようにするなど、夕食時の時間調整の有無について質問した。その結果、「時間を調整することはあまりない」と回答した生徒の割合が44%で、最も多かった。次いで、「時間を調整することが時々ある」と回答したのは36%、「時間を調整することがよくある」と回答した生徒の割合は21%であり、最も低かった。

多くの家庭では家族の誰かが遅れてもそれに合わせて夕食の開始時間を調整することはなく、家族全員が揃うことを待たずして食事を開始しているのである。これは、前の質問で家族全員が揃って食べるという回答と家族の誰かが欠けた状況での食事との回答にあまり差が見られない原因の一つであると考えられる。

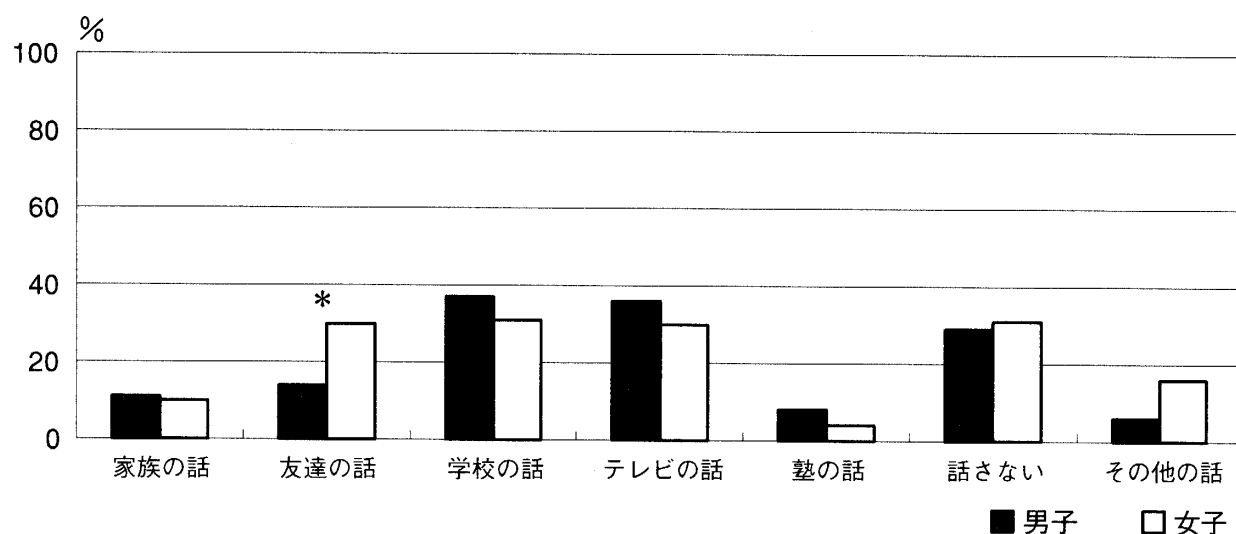
また、男女で比較したところ「よくある」と回答したのが男子で26%であったのに対して、女子で14%。「時々ある」と回答したのが男子で39%であったのに対して、女子は32%。「あまりない」と回答したのが男子は34%であったのに対して、女子で53%であり男女差が認められる結果となった。男子の方が家族揃ってから食事を開始しているものが多い。

夕食時は親子での会話に期待できる場である。その夕食時に生徒たちはどのような内容の会話をしているのかを掴むため、昨日の夕食時の会話内容について質問した。その結果、「学校の話」と回答したのは35%、「テレビの話」と回答したのは33%、「話さない」と回答したのは30%、「友達の話」と回答したのは22%、「その他」と回答したのは11%、「家族の話」と回答したのは10%、「塾の話」と回答したのは6%であった。「学校の話」、「テレビの話」を生徒たちは食卓の主な話題としている。また、「友達の話」では男女での差がみられ、男子では「友

達の話」と回答したのが14%であったのに対して、女子では30%であり、男子に比べ女子は友達の話の夕食時の主な会話内容としている。

ここで、着目すべき点は「話さない」と回答した生徒の割合が30%もいることである。平日、休日において、保護者との会話の充足度について質問した結果では、8割以上の生徒が保護者と会話ができていると回答していたが、昨日の会話内容では3割もの生徒が話さなかったと回答している。つまり、生徒らの意識の上では会話ができていると感じているのだが、実際にはそれほど会話できていないのである。

夕食時にテレビをつけているかという質問に対して、約9割の生徒の家庭ではテレビをつけ



*印はカイ2乗検定で男女による有意差が認められた (<0.05以下)

図6 昨日の夕食での会話内容

たままの夕食状況となっている。ほとんどの家庭ではテレビをつけたままの夕食であることから、生徒たちの家庭ではテレビをつけたままの夕食が日常化しており、テレビを見ながらの夕食風景は生徒たちに何の違和感もない状況となっていると考えられる。しかし、テレビを見ながらの食事では、夕食時、せっかく家族が揃い、会話をしていてもテレビを見ながらの会話になってしまう。これでは夕食時の会話が十分にされているとはいえない。

(3) 行動の共有からの会話機会

これまでの調査から、多くの生徒たちは生活の主体となる場は居間であり、食事も家で家族とともにしているし、会話もできていると感じている。しかし一方では、自分の部屋にこもりがちになり、会話ができている生徒もいる。また、会話ができていると思っけていても、実際には会話をしていないという、意識と現実とのずれも見られた。このような住まいの中での会話状況において、どのようにすれば、親子の会話を増やすことができるかを考察していくことは、今後の家庭生活を考える上で非常に重要なことである。

中学生という時期は、子供たちの自立心が芽生える時期であり、子供たちは自然と親よりも友達との関係を重要視する傾向がある。⁸⁾ 中学生時のような親子関係を取りにくい時期に親子の会話の充足をねらう手段として、役割分担・お手伝いなどの個人が主体となる行為ではなく、

家族のための行為に着目した。

まず、家庭内での役割分担・お手伝いが生徒たちの家庭でどの程度行なわれているかを掴む必要があると考え、家庭内での役割分担の有無について質問した。「役割分担がある」と回答したのは42%で、「役割分担がない」と回答したのは58%であり、「役割分担がない」生徒の方が多かった。さらに、役割分担以外でのお手伝いの有無について質問したところ、「お手伝いをする」と回答した生徒の割合は役割分担と同様の42%で、「お手伝いをしない」と回答した生徒は58%であった。また、男女で比較したところ、「お手伝いをする」と回答した男子は34%だったのに対して、女子は51%であり、男女差が認められる結果となった。

男子に比べ女子の方がお手伝いをしているが、それでも51%であり、半数よりもわずかに多い程度であった。役割分担やお手伝いのような、家族のための行動を生徒達は家庭であまり行なっておらず、家族のための行動をしている生徒の方が少ないという実態が見えた。

「役割分担がある」または「お手伝いをする」と回答した生徒は半数にも満たず、家庭内での行動の共有は十分とはいえないものであったが、「お手伝いをする」と回答した生徒に「お手伝いの際、会話があるか」という質問をした結果、7割以上の生徒が「よくある」、「時々ある」と回答していた。つまり、お手伝いのような行動の共有を通じて、親子での会話が生まれているのである。

その主な理由は、生徒たちが家庭で行なうお手伝いは、食事を一緒に作ることや食事の配膳、食事の後片付けなど、食事に関するものが多かった。食事の際は（食事と会話）での質問結果から、家族と同じ場にいることが多く、お手伝いを通じて無意識に親子での会話が生まれているのではないかと考える。また、風呂掃除やペットの世話のようなお手伝いにおいても、家族のために行なうお手伝いは個人主体の行動ではないことから、会話などのコミュニケーション活動はなくとも、家族の繋がりを強める行為であると考えられる。

お手伝いのような家族のための行動から親子の会話が生まれている。しかしながら、役割分担やお手伝いのような家族のための行動は、生徒の家庭では十分に行なわれているとはいえない。役割分担・お手伝いともに、行なっている生徒は半数にも満たず、行なっていない家庭のほうが多いのが現状である。

お手伝いの際には会話がよくされていることから、家庭内でのお手伝いを意図的に増やすことで会話を増やすことができると考える。

調査結果の考察

（住まいの中での親子の共有時間）

半数の生徒は家庭内での多くの時間を居間で過ごしていることから、コミュニケーションが期待できる状況にある。しかし、居間ではなく、自分の部屋で過ごしている生徒も多く、これらの生徒は家庭内で孤立しているため、コミュニケーションはあまり期待できない。また、親子間のコミュニケーションは食事の時間帯以外ではあまり行なわれていない。食事の時間帯では、親子で会話や同じことをして過ごしているのだが、食事の時間帯以外では、例えば親と一緒にいても、一人でテレビを見ているなどの個人主体の行動が夜間を中心に多くみられた。

（食事中における親子の会話）

夕食時、ほとんどの生徒は毎日、家で家族の誰かと食事をしており、個食や孤食が中心という食事状況ではない。しかし、家族全員が揃っての食事はそれほど多くはなかった。その背景には、もちろん保護者が仕事でいないという状況もあるだろうが、家族の誰かが食卓に遅れる

際に待つことがあまりないこともあると考えられる。また、テレビをつけたままの食事が日常化しており、親子間で会話ができていているという意識はあっても、実際には会話がな食卓も3割あった。

(行動の共有からの会話機会)

役割分担やお手伝いをする生徒よりも、役割分担やお手伝いをしない生徒の方が多くことから、家族のための行動があまりできていなかったが、お手伝いの際には親子の会話が多々されており、家族のための行動が、親子間のコミュニケーションに発展していた。

これからの親子コミュニケーションのあり方について考えたとき、積極的に親子間や家族間でコミュニケーション活動を行っていくことが求められているように思う。会話やその他のコミュニケーションが自然発生し、無意識のうちにコミュニケーションが取れているのであればいいが、コミュニケーションが取れていない生徒には、保護者側、子供側双方が積極的にコミュニケーションを行なっていかなければ、改善には結びつかない。具体的な手段は、できるだけ家族全員と一緒に食事を摂ることや、食事の際にはテレビを消し、もっと会話を楽しむことが必要だと考える。また、家庭生活の中では、勉強や読書の時間など、個別な行動を必要とする時間もある。勉強のような個別な行動においてもわからないところを保護者へ教えてもらうことなどによって、コミュニケーション活動へと変化させることができる。さらに、個別な行動ばかりを優先するのではなく、役割分担やお手伝いを通じての行動の共有を増やしていくことが必要である。アンケート調査結果からも、行動の共有から会話機会が発生していた。家族のための行動から、個人のための家族ではなく家族の中の個人であるという意識が生まれ、家庭内での個別化の減少、親子のコミュニケーション活動の増加へ繋がると考える。

今回のアンケート調査の結果から、会話ができていない生徒も少なくないし、これから会話ができなくなってくる生徒も現れてくるかもしれない。それぞれが好きなきことをして過ごしていれば、自然と個別な行動が多くなり、親子間での会話もだんだん少なくなってくる。親子間で会話やその他のコミュニケーションができる場を、保護者と生徒が積極的に作っていくことが必要なのである。また、生徒の意識では、会話ができていていると言っているが、一つの裏付けとして質問した昨日の会話内容からは、会話をしていない生徒が3割もいたため、毎日の親子の会話が十分にできているというわけではないようであった。

注

- 1) 子育て・教育子供の暮らしのデータ集2002年度版、生活情報センター、p.106
- 2) 内閣府政策統括官、日本の青少年の生活と意識第2回調査、財務省印刷局、2001、p.164
- 3) 小西史子・黒川衣代、親子のコミュニケーションが中学生の「心の健康度」に及ぼす影響、日本家政学会誌、vol.51、No.4、2000、pp.273-286
- 4) 前田哲次、日本子供資料年鑑、KTC 中央出版、2003、p.322
- 5) 教育アンケート調査年鑑編集委員会、教育アンケート調査年鑑上、創育社、2003、p.170
- 6) 山口県教育庁教育政策課内ふれあい夢通信編集部、ふれあい夢通信21号、山口県教育庁教育政策課教育企画室、2005
- 7) 足達己幸、なぜひとりで食べるの、日本放送出版協会、1983
- 8) 中間美砂子・桑原敏子、親子間のコミュニケーションと親和関係—学年別・性別・言語コミュニケーション—、日本家庭科教育学会誌、第36巻、1993、pp.1-24